



## ～眼鏡に慣れていく～

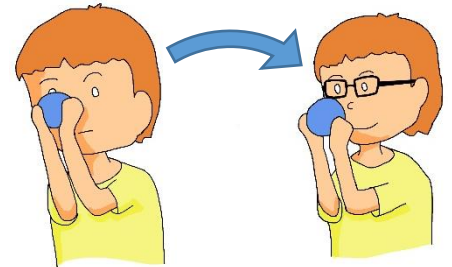
通常、赤ちゃんは生まれて間もないころの視力は0.02程度で、小学校に入るところまでに1.0程度になると言われています。乳幼児期は視力が伸びやすい時期ではありますが、先天的な眼疾患等による見えにくさがある子どもでは、医療の判断に基づいて1歳に満たないころから眼鏡を作り、見えやすい環境を整えていくことがあります。

しかし、眼鏡の装用は、幼い子どもにとっては違和感を覚えることもあり、つけてもすぐに外したがる子もいます。最初は無理をさせず、ほんの短い時間からつけるように、つけられたことを褒めてあげましょう。少しずつ慣れてきたら、眼鏡をつけた方がよく見えるという経験ができるように、子どもの好きな絵本やおもちゃなどを準備して、一緒に楽しめるようにします。その際には、保護者の声かけを忘れてはいけません。そして、子どもが眼鏡をつけているのを忘れるくらい一緒に遊べるとよいですね。



### ✚ 見えやすい位置や距離で見る経験を増やす

見えにくさのある子どもは、色々なものを近づけたり自分が近づいたりして見ようとします。目にくっつけるくらい近づけて物を見ることもあるでしょう。親にとっては、「そんなにテレビに近づいて見たら、目がもっと悪くなってしまう。」などと、とても心配になってしまいます。しかし、それは子どもが最も見えやすい位置や距離で見ようとしているので、“よく見たい”という気持ちを十分に満たしてあげてください。とはいえ、目を使いすぎたら当然疲れてしまいますので、十分に休ませることも大切です。

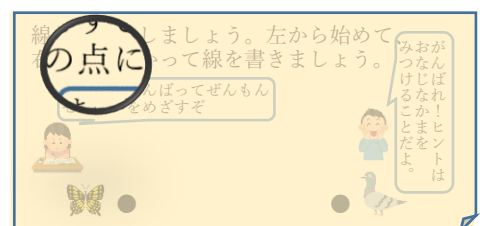
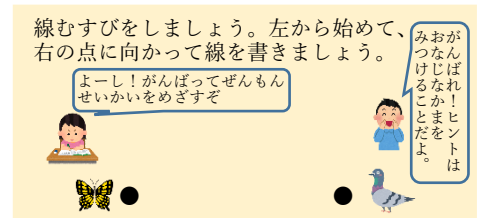


眼鏡を使うようになってきたら、それまでよりも少し物を離してみるようになったと感じることもあるでしょう。その差がほんの数cmだったとしても、この変化は大切に、子どもの見ようとする意欲を最大限に満たし、身の回りへの興味関心を高めたり物事への理解を深めたりする機会としてあげてください。

### ✚ 視覚的ノイズ（不必要な情報）をカットする

これは眼鏡に限ったことではなく遠用弱視レンズ（単眼鏡）などもそうですが、プリントや掲示物にかわいいイラストや凝ったレイアウトが施されていると、かえって必要な情報を把握しにくくなる場合があります。右図のイラストやふきだし、さらには横書きと縦書きの混在がそれにあたります。近づいたりレンズ等を使ったりすると、○で囲んだ部分のように見える範囲は狭くなるので、全体像を一度に捉えにくく時間も労力もかかってしまいます。必要な情報のみのシンプルなレイアウトの方が望ましいのは、そのような理由があります。

※見えにくいように、あえて小さい文字で表示しています。



<参考文献>

大川原 潔 他 編 「視力の弱い子どもの理解と支援」 1999 教育出版